

12~1月号

カウンセラーだより

たじま絆保育園 2020.12・1月号

保護者の皆さま、こんにちは。もう冬がそこまで来ていますが、今年度は暖冬でしょうか？お体暖かくしてください。

さて今月号のおたよりは、「日本人の恥の意識」についてです。あまりにもおなじみ過ぎて普段あまり考えないと思いますが、そのわりによく恥ずかしがっている日本人...これを読んだらいつもと違う景色が見えてくるかもしれません。



「恥の意識と文化」

恥は何歳から感じる？

発達心理学ないし感情の心理学において恥の意識は、何歳ぐらいから生じる感情と言われているでしょうか？答えは2歳ぐらいからです。ただ、もちろん子どもの気質(元々の性格)によりけり、恥の意識の強さや初発年齢には多少の差があります。

「恥の意識が2歳から生まれるなんて子どもを育てていれば当たり前」と思われた保護者の方も多くいらっしゃると思います。ただ、それこそ恥ずかしながら、わたしはこれまで恥の意識は「4歳ごろから生まれる」と考えていました…。なぜか？それは、「相手の立場に立って考えられるようになるのは早くても4歳から」だからです。恥の意識は相手から自分を見る意識がなければ働きません。でも、果たして2歳から相手の立場になって考えられるのでしょうか？もしそれが本当なら、2~3歳を育てている保護者の方は「なんでそれなのにこちらの言い分を聞かないんだ！」「いや、それにも増して自分が自分が、と主張してくるぞ！」と嘆いている保護者も多くいらっしゃると思いますが、本当のところはどうなのでしょう？皆さんはどう思いますか？今のところ私は、「2歳から相手の立場になって考えることは基本的に難しい」「でも相手や状況、場所に関わらず、自分の中で恥ずかしがることは2歳ごろから生じてくる」と考えています。そう考えたら、わたしたち大人が感じている多くの恥の意識も、自分が勝手に恥ずかしがっている場合も少なくない？かもしれません。

恥と文化

少し古い文献なのですが、ルース・ベネディクトが書いた『菊と刀』(何だか時代劇みたいな...)には日本人の恥の意識について書かれ、対比として「西洋は罪の文化」と提唱しました(でも日本人も真面目だけに罪悪感をよく抱くのでは！？と思いますが、西洋の罪の文化は西洋宗教の罪や懺悔、告白を意味していると考察されます)。心理の仕事をしていて、普段生活をしていて、よく思うのですが、「日本人は恥ずかしがり」という事です。カウンセリングにおいても、恥の意識はクライアント(相談依頼者)を脅かし、時に傷つけます。先ほど、「恥の意識は他者の目を意識するから生じる」と述べましたが、わたしたち日本人は小さいころから「静かに」「待ってて」「急いで」など、向こうにいる他者を意識した育児が行われてきました。よくありますよね、「誰かが見てるぞ」シール。山奥で廃棄物の不法投棄に悩んだ管理人が鳥居を置いたら、不法投棄がなくなったとか。むろん、鳥居は人ではありませんが、おてんとうさまなどの大いなる存在も含め、日本人は世界的に見ても、他者を意識する民族に違いありません。とある外国人(西洋人)の方が言っていました。「日本の奥さんは日本で空気読めなくても、外国に行ったらとても気遣いのできる人」と。それだけ他者を意識している日本人ですが、美徳な半面、「もう少し堂々とありのまま自分を生きたら楽になるのに」と思う今日この頃です。

12月~1月のお知らせ

- 基本的に水曜の朝から夕方まで出勤の予定です。
詳しい時間は園かカウンセラーまでお問い合わせください。



**2月号のテーマは「児童館」について
お知らせ致します！是非ご覧下さい！**